

テキストにおける機能語のふるまいについて

高 崎 みどり

1. はじめに

本稿では新聞記事や小説といった身近な文章において、助動詞や指示語等の“機能語”がルールや体系的な位置づけでは説明しきれないふるまいをすることについて、テキスト分析的に考えてみたい。テキスト分析といってもいろいろなアプローチがあるが、ここでは新聞記事についてはいわゆるCDA（批判的談話分析）について紹介し援用する。小説作品についてはレトリックの面から“機能語”が文体形成にいかに関与しているか、という観点から見てみたい。

前提として、いわゆる学校文法において、構文論として自立語・付属語という大きな括りで扱われている各語について、マッカーシー（1995）にならい、「内容語」と「機能語」という括りで再編成する。マッカーシー（1995）は「3 談話分析と語彙」という章の「3.5 語彙とテキスト構成」の中で、以下のように述べている。

言語では、文法語 (grammar words) と 語彙語 (lexical words) とが区別されることが多い。この区別は、ほかに、機能語 (function words) と内容語 (content words) とか、虚語 (empty words) と実語 (full words) とか呼ばれることもある。この区別が役に立つのは、言語の閉じた体系 (closed systems) に属して文法的意味を担う語と、開いた体系 (open systems) に属して、名詞、動詞、形容詞、副詞という主要な語類に属する語とを区別することが可能となるからである。英語の *this* (この)、*that* (あの/その)、*these* (これらの)、*those* (あれらの/それらの) は、閉じた体系に属し (代名詞や前置詞も同様)、「指示詞」という文法的意味を担っている。*monkey* (サル)、*sculpture* (彫刻)、*noise*(雑音)、*toenail* (足のつめ) などは開いた集合に属し、通例、言語の創造的な側面であると考えられている。(p105)

一般的に機能語は上記で「文法語」とも呼ばれるように、文法論で扱

われることが多く、具体的な場を捨象した形態論、構文論として機能やルールを論じる。指示詞や形式用言類を含めてこれらは"閉じた体系"なので、多くのテキストの中で繰り返し同じ機能語が使われることとなるのだが、頻用されるからといってそのテキストの特徴に結びつくことはあまりないと考えられている。一方、内容語は"主要な語類"であり"開いた体系"なので、テキストの意味内容部分に關与し、ある特定の語彙が頻用されればそのテキストの特徴に結びつくことが多いと考えられている。

ゆえにコーパス等を使ってテキストの特色をつかむために語を分析するということどうしても内容語に偏りがちであるが、ここでは、言語使用の現実的な場であるテキストの中では、実際にどのように機能語がふるまって各種テキストの意図を果たしているのかを観察する。すなわち機能語について構文論としてではなく、テキストとの関係から語をみていくということを目指す。

2. ジャーナリスティックなテキストにおけるストラテジー

ジャーナリスティックなテキスト、特に新聞記事は、つとに鈴木(1982)に詳細な指摘があるように、ニュース性優先、そして限定された紙面スペースという時間・空間上の制限、および客観報道を掲げるところから、文法的語法的にも特有のふるまいが見られる。それらを実態的に捉えて提示し、テキストの中で発揮される機能について指摘してみよう。

たとえば、機能語である助動詞「れる・られる」を使った受動表現による文末表現は、報道記事というテキストの中で特有の機能を果たす。

例1) ①防衛省は、弾道ミサイルを迎撃する能力のある海上自衛隊のイージス艦を今後10年以内に現行の6隻から8隻態勢に増やす方針を固めた。②北朝鮮の弾道ミサイルへの対応を強化する狙い[°]。

③12月に策定される^a 防衛大綱に明記される^b 見通し^d。

(「イージス艦8隻に 2隻増、北朝鮮対策強化」朝日新聞朝刊4面 2013年11月6日)

下線部aとbは、受身¹形になっているが、これによって主語を示さなくてもすむことになり、「策定」したり「明記」したりする主体を曖昧にするという効果がある。主語を明示しないのは、主体明示に特段

のニュース価値がない場合や、取材がそこまで及んでないとき、または主体を明らかにすると、それについての説明が必要になってきて、スペースが不足しそうなとき、等、報道のテキスト特有の種々の場合が考えられる。

その前の①②文は、「防衛省」という、「増やす」「方針を固める」「強化する」の主格が、(それが省略されているということも含めて)明確になっている。それが、この③文で態を受動態に変えることで、「策定」「明記」するのはだれかということをはっきりとすると、あたかも自然に起こることのように見えてくる。結果的に日本語文としてはむしろ自然な文になっており、さっと読めてしまう。

このように、報道記事文のなかで、受身形にするということは、行為する主体を省略しても不自然ではなくする、という効果があることがわかる。

そのことは、逆に、受身形にしなければ、行為する主体が明確になるという効果もあることになる。以下の例2)は、国家安全保障会議の「9大臣会合」と「4大臣会合」についての形骸化、屋上屋という批判に関して紹介している記事(「大臣会合、議事録作り公開を担当記者はこう見た」)の中の一部である。

例2) ①しかも、4大臣会合も9大臣会合も議事録を作成しない。②議事録がなければ会合の内容は秘密のままではどう文民統制を及ぼしているのかもわからない。

(「大臣会合、議事録作り公開を担当記者はこう見た」(署名入り記事) 朝日新聞朝刊4面 2013年11月6日)

この①文は、「しかも、4大臣会合も9大臣会合も議事録が作成されな

-
- 1 いちおう、「受身形」としたが、これらの「れる・られる」の用法は「非情の受身」と呼ばれる用法であり、典型的な受身用法とは言えない。むしろ「自発」にも近い。文法的な説明としては、外山映次(1985)は『「れる・られる」の基本義については自発説と受け身説とがあるが、現代語では『受身』の用法が中心となる』とするが「受身・可能・自発・尊敬の四類は一つの系列にあるため四類の分類は便宜的であって、実際には相互のかかわりを考える必要がある。」とも述べている。さらに上記の記事文のような用法に触れて『「非情の受身」のうち、『…と言われる』『…と見られる』『期待される』など現代語で多用される、多数の人物・集団が動作主となり、叙述内容がきわめて客観的に事務的に述べられる用法は、受身の意識が薄く、『自然可能的な受身』とも呼ばれる。』(以上p105)と指摘する。

い。」と受け身文である場合と比べると、「作成しない」という行為がより意図的であるという印象を受ける点が異なっている。「こう見た」という見出しの通り、事実の報道というよりは、記者のコメントという趣旨であり、批判が前面に出ている。署名入りという書き手の明示が、表現態度にも影響を及ぼしている例である。

ところで、言語主体の事柄・出来事に対する表現態度をモダリティと呼ぶとすると、モダリティ形式は主として文末に集中してあらわれるが、「ようだ」「みたいだ」のような助動詞ばかりでなく、一般的な名詞もその役を担うという例が、報道記事文では少なくない。

たとえば、例1)に戻って、②文末の「狙い。」③文末の「見通し。」は体言だけで終わっている文末である。こうした体言止めは、他にも「～を重視。」「～と主張。」など報道記事文に多く見られる。これらのように、「狙いだ。」「見通しである。」「～を重視している。」「～と主張した。」などのようなサ変動詞や補助動詞、助辞をつけない方がスペースの節約になるということもあるが、テンスも判断辞も付さずにおくことで、文末を意識させずにすみ、結果的に弱い断定形式となりえているという効果もある。こうした「弱い断定形式」は、報道記事のように中立的な印象を与える表現形式をなるべく採りたい場合に好まれるものと思われる。

加えてこの例2)の場合、モダリティとしては「見通し」という語はかなり実現性のあることとして事柄を判断していることになるものと思われる。同様に、たとえば、名詞「模様」(「党省委員会ビルだけでなく、居住区も襲撃対象として狙われていた模様だ。——「党関係者居住区 標的か」2013年11月8日朝日新聞朝刊 国際面)や「見込み」「方向」などが、報道記事文によく使用される。

すなわち、一般的な名詞と、モダリティを表す助辞とが相補的に、あるいは連続的に働いている現象が、報道文テキスト内に観察される。「内容語」と「機能語」あるいは「自立語」と「付属語」といった次元の異なるものがテキストのなかで同質の働きを分担しているということとなる。加えてジャーナリスティックなテキストにおける慣用化した表現という存在もこれらの現象に関わっている。すなわち、こうした名詞単独文末に加え、受身表現や、後で述べる「～テイル」表現も本来の文法的に託されている機能とは異なる表現目的で使用するこ

とが報道のテキストの中では慣用化している。定型化することにより記事作成の省力化がはかれるためである。

なお、上記の「見通し」「模様」あるいは「見込み」という語はいずれも名詞で、語自体はモダリティとは無関係であるということに注意したい。

それぞれ国語辞典には

- ・見通し—①そこからずっと遠くまで見渡すこと。②将来の予測。③「おー」の形で、人の気持ちを全部知っていること。
- ・模様—①織物・工芸品などにかざりとしてつける、いろいろな形や絵。②ありさま。ようす。
- ・見込み—①先の予想。②将来に希望がもてること。

(いずれも『三省堂 現代新国語辞典』第4版 用例・類義語等の付加情報はすべて省略した)

とあり、「見通し」「模様」は②である第2義が先の例に用いられている方の意味に近く、また①の第1義の方が具体的なものとをさしているのと比べると、②の方が抽象的である。「見込み」は、先の例としては①の第1義と見えるが、古くはより具体的な「①見た様子。」「②目をつけてねらいとするところ」(『日本国語大辞典』第2版)があった。

ともかく、第一義的には具体的な物事を指すはずのこれらの語の意味において、抽象性が前面に出てくると、“確実とは言い切れないが”という表現態度を伝える推量や臆化などのニュアンスが加わってくることは確かだ。

報道のテキストでは、これらのように語彙の意味が抽象化してモダリティ的な部分をも示せる名詞などを、出来事の蓋然性を表すために使用することが慣用化され、手っ取り早い言い方として認知されている。

これらのことは、語彙体系や文法体系内部の必然的变化というよりも、新聞記事文という、テキスト成立時の諸事情による制限が、文脈内部でのレトリカルな要求と相まって、最初は比喩的な、異なる次元からもってきた新鮮な表現としてもちいられたものが、たまたまそのジャンルにおける表現形式の空き間²にうまく嵌って、便利に利用を重ね、慣用化したものである。

慣用化したものが語彙的な意味を失って、機能語のようにふるまうのは「見た様に→みたいだ」「かどうか知らぬ→かしら」「筈→はずだ」や「(運命を) 決する」の連用形「けっして」などの前例がある。これらはいろいろなテキストが使用を重ねる場を提供したことによる慣用の力である。言語変化のひとつのありかたである、【誤用→多用→慣用→正用】というプロセスが起こるのは常にテキスト、そして日常語や日常語に近いテキストの中であることと関連している。

モダリティ的な表現形式は効果の消耗が激しく、常に不足感が存在しており、新しいものの供給を必要としている。特にジャーナリスティックな文章においてそれは顕著であるといえよう。

名詞単独文末については、安部(2009)の指摘する、近代語における名詞の増加、サ変動詞、ナ形容詞語尾と組み合わせる"パーツ化""名詞優位化"ということも関係してきていると思われるが、紙幅の関係もあり、別稿に譲る。

次にアスペクトも同様な観点でみてみよう。代表的な「～テイル」形式をとりあげる・

これは、「～ル」形式と比較して、動詞の表す事態の推移という一定の時間の中で、それらに最終決着がついていないことを示せる点で違いがある。

例3) 当局は爆弾は大量生産されたものでなく、手製との見方を強めている。(「爆弾材料ネット売買 鉾山火薬横流し?」2013年11月8日朝日新聞朝刊 国際面)

この例における「見方を強めている」は、当局の"爆弾は手製だ"との「見方」(＝判断)を婉曲的に伝えているのであって、その状態が「～テイル」と、進行中であるということを伝えたいのではない。このようにアスペクトをその動詞の時間的様相とはあまり関係なく、書き手の確信の強弱を表現するのに用いている場合がある。

例4) 番組は1996年9月に始まり主婦層らの支持を集めてきたが、最

-
- 2 この場合だと、事柄に対する態度を表すモダリティ表現形式のヴァリエティが助辞だけでは不足しているという空き間、すなわち推定ではないが、言い切りほど強く断定したくない場合が空き間になっていたと考えられる。

近では、視聴率が2~3%台（関東地区、ビデオリサーチ調べ）を記録するなど、低迷していた。後継の番組について、TBS広報部は「未定」としている¹。（『はなまる』来年3月終了」2013年11月6日朝日新聞朝刊 10面）

下線部eで、「～ていた」は、テンスが過去だということもあり、番組打ち切りが明らかになった時点までの「最近」という時間の幅の中の、数字に裏付けられた確定事実として伝えている。一方fの方は、テンスが非過去形ということもあり、今後何らかの変化がある可能性も含ませている。「と」という引用助詞とカギかっことがあるので直接引用となり、そのように言ったということは事実なのだが、それはあくまでも伝聞であり、書き手（記者）の判断ではなく情報内容の事実性までは保証しない（＝後継番組がもう決まっているかもしれない）。これらはアスペクト、というよりもニュアンスの問題であるが、アスペクトという文法現象をニュアンスに利用する方法が、報道文的であるといえよう。

テンスを表すタ形とル形の対立は、事実と見解の区別という機能も果たすことがあることはよく知られているが、見解については微妙なニュアンスをも示すことができ、報道文ではストラテジーとして生かされている。

次の例はどうか。文科省が就活時期の変更についてどう感じたかを大学4年生に調査した結果を報道する記事で、インターンシップが就活のスタートとなっている現状を紹介したあと

例5）インターンシップに対しては、学生の30.7%が「採用選考になっていると感じた」と回答した。入社を聞かれたり、選考の一部と言われたりする例があったという。開始が変わらないのに選考時期などが遅くなったことで、長期化と感じられたとみられている。（「今年から遅らせた就活 58%『むしろ長期化』」大学・短大回答」2015年6月26日朝日新聞朝刊 社会面）

「～ている」を受身表現と重ねた「～とみられている」は、重ねたことにより二重に事柄から遠ざけられており、断定が弱いだけ、客観的な印象を与えられることが計算されている。しかも「～とみられている」の直前も「長期化と感じられた」と、いわゆる自然可能のよう

な「られる」が使用されており、主語が曖昧になっている。すなわちこの例でも、誰が「長期化と感じられた」と判断しているのか、主語が不要なだけに曖昧となり、そのぶん客観的な印象を与えるのに寄与していよう。報道文というジャンルのテキストの中では、たとえば「見る」ならば極端に言えば【～とみる、～とみている、～とみられる、～とみられている ～との見方を示している ～との見方を強めている】、「する」であれば【～とする、～としている、～とされる、～とされている、～という判断を示している、～という判断に傾いている】のような"活用"が存在し、文法的な機能とはあまり関係のない、ニュアンスレベルで、伝達の直接性からの"遠ざかり"の段階ができていてのではないか。

3. 報道記事文をCDAの観点からみる

これらのことをCDA(critical discourse analysis 批判的談話分析³⁾)からみてみるとどうであろうか。

フェアクラフ(2012)は、新聞ニュース記事"Firemen Tackle Blaze"(Lancaster Guardian, 7 October 1986)を分析して、いくつかの先行研究を引きつつ以下のように述べる。

ニュース・ストーリーを生み出すということは、より根本的には、断片的で明瞭な輪郭をもっているとは言えない出来事を、明確で独立した出来事として解釈し、どの出来事を排除するかを決定し、さらにはこれらの構築された出来事を互いに特定の関係におく、ということなのである。ニュースを作成することは、きわめて解釈的で構築的なプロセスであり、単なる「事実」の報告ではない。このことは、ニュース・ナラティブがフィクションのナラティブと同じだということを意味しているわけではない。ニュース・ナラティブは、歴史のナラティブ(Callinicos 1995⁴⁾)と同

3 橋内(1999)はCDA(またはCL critical linguistics とも言う)について「ことば遣いは、客観的世界についてのコミュニケーションを透視する媒体でもなければ、静的な社会構造の反映でもない。ことば遣いは様々な現実をあぶりだし、それと関連しながら常に作用している社会過程(social processes)の一部として働くのである。クリティカル言語学(CL)は、適切な言語分析の方法を用い、関連性のある歴史的・社会的状況を踏まえて分析すれば、お決まりの通常の談話の中に潜んでいるイデオロギーを表面に浮かび上げることができる。」(p160)としている。

様、「指示的意図 (referential intention)」をもっており、ストーリーと実際の出来事のあいだの関係に関する疑問に、真実に関する疑問に、開かれている。ニュース・ナラティブは、また、「焦点化」になぞらえることのできる、「説明的意図 (explanatory intention)」とでも言うべきものをもっており、ある特定の視点を含んだ関係に出来事をまとめることで、それらの出来事を理解しようとするのである。もしニュースをガバナンス (第2章参照) の装置の一部として考えるならば、ニュース・ストーリーが、出来事と出来事に対する人びとの反応を、規制し管理することを目指している、という認識を強調することになる(Allan 1999⁵)。

(p137)

ここに言及されている第2章"テキスト、社会的出来事、社会的実践 Texts, social events and social practices"では、テキスト分析に関わる問題と同時に社会研究に関わる問題も扱われている。"社会研究"は本稿の守備範囲外だが、テキストや会話が何らかの社会的実践として表象されるものであるとするならば、その研究は"社会研究"と無関係である筈はないことは、多くの「社会言語学」の研究成果が物語っていると考えている。

さて、さきほど見たように新聞記事の中での受身や主語省略、名詞化には、報道側のストラテジー的な意図がある。新聞などのマス・メディアの関わるテキストは社会の中で一定のパワーを持ち、社会で日々起こる出来事と我々の間に位置して、それらを報道という社会的実践で繋いでいる。即ちフェアクラフ (2012) がいう「社会的作用者」に当たると思われ、「作用者は、テキストを織り、テキストの要素間の関係を設定」し、この過程には制約や慣例があるものの、「それでも、社会的作用者には、テキストを織ることにおいて、多くの自由が残されている」(pp.25-26)。

そしてフェアクラフ (同上) は「ガバナンス」については、第2章の中で、

私は、ここでは「ガバナンス」を非常に広い意味で用い、他の

4 Callinicos, A. (1995) Theories and Narratives: Reflections on the Philosophy of History, Durham, N.C.: Duke University Press.

5 Allan, S. (1999) News Culture, Buckingham: Open University Press.

社会的実践（のネットワーク）の統制もしくは管理運営を目指す、組織あるいは団体内の、いかなる活動に対しても用いる。（p49）

とし、更に

通常、「マス・メディア」と呼ばれるものを、ガバナンスの装置の一部であると主張することもできるだろう。つまり、テレビ・ニュースのようなメディア・ジャンルは、政治や行政のような他の社会的実践を再コンテキスト化し、変容させる。（p51）

と指摘する。また、最後の要約のところで、テキストとテキスト分析の関係的見方についてまとめて、

テキストの（意味論的、文法的、語彙的（ボキャブラリーの））「内的」関係は、テキストの（社会的出来事の他の要素とのそして社会的実践と社会構造との）「外的」関係と、ジャンル、ディスコース群、スタイル（これらをテキストは利用し節合する）の「間ディスコース的」分析の媒介を通して、結びつけられている。（p63）

と述べている。

本稿で例文として使用した新聞記事などの報道文テキストは、他のテキストと比較して社会的出来事・社会的実践・社会構造とテキスト内言語の結びつきが、一定のガバナンスのもと、より"構築的"である、ということを示している。

一方、テンスについて、クワーク（1988）も次のように指摘する。すなわち、動詞の時制というものは「経験的か推測的かのいずれか」で、「未来時制は、意志・意図・可能性、つまり推測ということから成り立つ」が、「現在と過去」は「経験」によって知っている事であり、この二つの違いは、「過去時制は特定の時間を指示する働き」、「現在時制」は、「一般的な状況、つまり日付のない事がらに関係」し、「経験に関しての超時間的な真理との関連で解釈される傾向」という差異であると指摘している（p136）。また、ジャンルとの関係で、受動態（科学的記述）や命令文（料理法）が使用されるし、さらに新聞では、長い修飾語を伴った名詞句（～して～した○○は）「読者にとつ

て『新しい』かもしれない情報を、あたかも『所与』のものであるかのように扱い、読者が実際持っている以上にはるかに多くの素養と知識を備えていると錯覚させる」という（同上p220）。

以上のようにCDAの観点からみると、中立・客観を標榜する報道記事文において、透明なルールにしたがっているはずの機能語の文法が、テキストの目的を達するためのストラテジーとして慣習的に使われている可能性のあることがわかる。

4. 文学テキストの中の機能語のふるまい

さてそれでは、次に文学テキストにおいての、機能語のふるまいについて観察して見よう。これについては文体分析の方法を援用し、不定・疑問詞も含む指示語や、文末のテンスの使用実態とテキストとの関係を見る。

4-1、小説「明暗」のコ・ソ・ア・ドと作品構成

夏目漱石「明暗」⁶の冒頭部近くをとりあげて、テキストの始まりにおいて、主人公の内心の吐露のなかに集中的に使用されたコソアド、特にアとドが、その後の長い展開を支配し、作品に一種の構造を与えているということを見てみたい。テキストの始まりの方であれば、それほど指示する対象が豊富に出てきているわけではないのに、コソアドを集中的に使用することで読者にサスペンス（宙吊り感）を掻き立て、主人公の複雑な内部にいきなり触れてしまうような感覚を惹起して見事だ。

この作品は188回まで連載されて、漱石の死により中断された。その連載第2回には男性主人公津田がこんなことを考えていることが紹介される。

体調が悪く、医者手術を勧められた帰途、津田は体というもの自分の知らないうちにどんな異変がおこっているのかわからないものだと思うのだが、突然

6 「明暗」―夏目漱石の中絶未完の絶筆。大正5年5月から東京朝日新聞・大阪朝日新聞に連載。12月9日の漱石死後も、14日まで掲載され、漱石最大の長編となった。会社員津田が医者から痔疾のために手術の必要を言い渡されるところから、入院・手術を経て温泉場に湯治のために赴き、昔の恋人清子に再会するまでの約半月間を、種々の人物配置と緻密な場面構成、緊迫した会話・心理描写で描き出す。（平岡敏夫他編『夏目漱石事典』勉誠出版、竹盛天雄編『夏目漱石必携』學燈社、などから）引用は『筑摩全集類聚 夏目漱石全集8』より。ただしフリガナは省略した。

「精神界も同じことだ。精神界もまったく同じことだ。いっとう変わるかわからない。そうしてその変わるところを己は見たのだ。」

(「明暗」第2回)

と心の内で叫ぶ。その精神界が変わるところを見たというのは誰のどんな心変わりなのか？この第2回の最後に

「どうしてあの女はあすこへ嫁に行ったのだろう。それは自分で行くと思ったから行ったに違いない。しかしどうしてもあすこに嫁に行くはずではなかったのに。そうしてこの己はまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それも己がもらおうと思ったからこそ結婚が成立したに違いない。しかし己はいまだかつてあの女をもらおうとは思っていなかったのに。偶然？ポアンカレーのいわゆる複雑の極致？なんだかかわからない」

(「明暗」第2回)

最初に出てくる「あの女」と二番目三番目に出てくる「あの女」とは違う女性らしいが、よくわからない。恋愛・結婚がらみの心変わりなのか、ということは伝わってくるのだが。

この回以降も、さまざまな形で、何か過去にあったらしい、ということが何度も仄めかされる描写がある。これが新聞連載小説であることを考えると、是非とも次が読みたくなるように"釣って"ゆかれる、あるいは"何だろう？" "何故だろう？"とサスペンスフルに"吊って"ゆかれる文体なのは必然なのである。

連載2回目にして早くも出てくるこの「どうしてあの女はあすこへ嫁に行ったのだろう。」という疑問、そして自分の心さえも「この己はまたどうしてあの女と結婚したのだろう。」というわからなさ。これが、あとの186回分を通じて追求される。「どうしてあの女はあすこへ嫁に行ったのだろう。」の方は、答えを渴望するあまり、(中絶した)作品の最後近くで「あの女」である清子を追って温泉場まで行く破目になる。「この己はまたどうしてあの女と結婚したのだろう。」の方は、自らを訝しむあまり、もう1人の「あの女」である妻のお延の言動を冷ややかに観察する新婚生活となり、お延の心の不安と作為を呼ぶ。そしてこれらはこの作品の通奏低音となって響きつづけ、クライマックスへと導かれる予感を覚えさせる。「偶然？ポアンカレーのいわゆる複雑の極致？なんだかかわからない」と宙吊りに揺れながら、「あの

女」のことを思い出しつつ、別の「あの女」と暮らす日々の描写を通じて、さまざまな布石を置きつつ、漱石は津田の運命に周到な着地点を用意していたのだと感じられる。

鷗外が、上から見下ろして、自在に和漢洋の語法語彙を駆使してすべてを把握してみせる文体であるならば、漱石の絶筆「明暗」は、どこまでウンウン押して行っても人の心は把握できないという絶望を抱えながらも、ことばの力でねじ伏せようとして遂に力尽きた文体であると思われる。

漱石特有の、ことばが言葉を生んでいくダイナミズムは、初期の「情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくい」と悟った時…」（「草枕」明治三十九年）のような"尻取り文"からだが、後期になると、この例文のように執拗ともいえる、一步一步地を這うようにしか進めない思考と文体の歩みが同調するような表現となる。近代文体の一つの到達点を示している「明暗」の文体に、指示語が一役かっているのは興味深い。

また指示語は文体形成ばかりでなく、テキスト構造にも関わる。先に示した「明暗」連載第2回の引用部分に「どうして～のだろう」が2回繰り返されている。その2回繰り返されることによる2つの重い投げかけが応えられるまでを、すなわち、"どうして恋人だった清子は、自分を選ばず他の男と結婚したのか？"と、""どうして自分は結婚するつもりが無かったお延と結婚したのか？"に対する答え、つまり津田が自分自身にその淵源があるのだということを思い知らされるまでを小説の構造として準備していたのではないか。そこにいくまでは、主人公津田と一緒にものがきつつ、自らの中にその答えを探っていくという苦しい作業をしていく決意があったのではないか、と考える。

4-2、小説「半日」における出来事の1回性と恒常化の様相

次に森鷗外の「半日」⁷という短編小説の一節をとりあげる。「舞姫」に始まる初期三部作から18年余を経ての鷗外初めての口語体小説である。ここでは小説につきものである「～タ」形に、非過去の非「～タ」形、「～テイル」形式と説明の「ノデアル」がモザイクのように組み合わせ、その反復によって、ある"半日"がいつのまにか"恒常"であるかのように感じさせる仕掛けが施されている。

冒頭から3段落を引こう⁸。

六畳の間に、床を三つ並べて取つて、七つになる娘を真中に寝かして、夫婦が寝てゐる。宵に活けて置いた桐火桶の佐倉炭が、白い灰になつてしまつて、主人の枕元には、唯だ心を引込ませたランプが微かに燃えてゐる。その脇には、時計や手帳などを入れた小蓋が置いてあつて、その上に仮綴の西洋書が開けて伏せてゐる。主人が読みさして寝たのであらう。

一月三十日の午前七時である。西北の風が強く吹いて、雨戸が折々がたたと鳴る。一間隔てた台所では下女が起きて、何かことごとく音をさせてゐる。その音で主人は目を醒ました。

裏庭の方の障子は微白い。いつの間にか仲働が此処の雨戸丈は開けたのである。主人は側に、夜着の襟に半分ほど、赤く円くふとつた顔を埋めて寝てゐる娘を見て、微笑んだ。夜中に夢を見て唱歌を歌つてゐたことを思ひ出したのである。

「～ている（てある）」と非「タ」形で状況を描写し、1回性のできごととは「目を醒ました」と「微笑んだ」、説明は「～のである（のであらう）」の組み合わせで、特定の「半日」の始まりが描かれる。

しかしながら、このあと朝食になるときに起こってくる1回性のできごとは、奥さんの性格や常の言動と結びつけられて

風通の二枚襲の不断着に、茶縹銘撰の羽織を引掛けた奥さんが、玉ちゃんに元禄袖の友禅めりんすを着せて、連れて出て来たときには、博士は例のお茶の湯の手前が済んで、「玉、お仕舞が出来たら、御飯に來いよ」と、言ひ棄てて茶の間に往く。茶の間には母君が待つてゐて、博士と玉ちゃんのお給仕をして、一しよに食

7 「半日」—明治42年3月『昂』に森林太郎名で発表。文科大学教授高山峻蔵博士の妻と母の不和を中心として、ある日の家庭の有様を妻への批判的な視点で描いた。発表以後昭和26年まで42年間全集・単行本に収録されなかったのは、鷗外自身の家庭を描いたと解釈された「自家用性」のため、家族に配慮したからと言われるが、そうした現実結びつけた読みには否定的で「真の創作小説」とする見解も出されている。（宗像和重・松木博「解題」『鷗外近代小説集第一巻』岩波書店、吉田精一「解説」『森鷗外全集1』筑摩書房、三好行雄「明治四十年代の鷗外の位置」『シンポジウム日本文学13 森鷗外』学生社、などから）

8 引用は『鷗外近代小説集第一巻』岩波書店（2013）より。ただしフリガナは省略した。

事をするのが此家の習で、奥さんの膳の背後には、空しき座布団があるのである。奥さんは皆の食事が済んでから別間で食べる。これは食事ばかりではない。奥さんは母君と少しも同席しないのである。

と一回性のできごとがきっかけになり、"常にそうである"奥さんの態度が「のである」で説明される。そしてこの少し後に

妻を迎えて一家団欒の樂を得ようとして、全然失敗した博士も、此城丈は落されまいといふので、どうしても母君と一しよに食事する。玉ちゃんは子供で、食事を待つてはゐないから、お父さんとおばあさんと食するとき、一しよに出て食べる。そこで奥さんが一人跡へ残ることになってゐるのである。

と恒常的なこととして非「タ」形が重ねられ、「～のである」と説明される。こうした繰り返しがいくつも周到に組み合わせられ、ものごとが一般化された挙句、結尾は

その中に台所の方でことごとと音がして来る。午の食事の支度をすると見える。今に玉ちゃんが、「papa、御飯ですよ」と云って、走って来るであろう。今に母君が寂しい部屋から茶の間へ嫌はれに出て来られるであらう。

として終わる。ここは単なる慨嘆でなく、起ころであらう未来のことを必然のものとして予想する態である。冒頭の朝食の仕度の「ことごとと」の音から結尾の昼食の仕度の「ことごとと」の音までの半日の出来事が1回性の出来事ではなく、恒常性を持ちうる必然のものであるという説得を積み重ね、冒頭—結尾で平仄の合った到達点に達しているのである。幾種類かの文末形式を周到に配し、"家庭"というものの現実から、"家庭"という存在の真理を導こうとした鷗外のストラテジーがここに露呈しているとみることができよう。

言文一致体ムーブメントのひとつの焦点であった文末の問題を、始めて試みた口語体作品で早くも自家薬籠中のものとした鷗外の、その後も文体の特色として指摘される「すべてを把握する神の視点」へはもう近い。

4-3、小川国夫小説作品の「た」文末連続について

高崎（1999）では小川国夫⁹の作家としてのデビュー作「アポロンの島」を収めた単行本作品集『アポロンの島』（1957）以降『アフリカの死』（1980年）までの7冊の単行本の長短編合わせて73作品の文体を論じている。その中で、文末表現についてとりあげ、「タ」形文末が極めて多く、しかも連続することを指摘し、

「タ」形連続の文末と、変化に富んだ会話文が、小川作品の調子を作り上げており、魅力にもなりえているのだと考えられよう。「タ」形文末の連続によって、何かがもう少しで起こりそうな、切迫した気配が徐々に高まって行くような場合もあれば、あるいは無表情にできごとがまさに「竹をたてかけるぐあい」に「ならべられてゆくような場合もある。いずれも張りつめた雰囲気を作り上げている。（pp.117-118）

としている。

たとえば、「心臓」¹⁰ という作品において、

二人が話している間に、山の影は水のついた田圃を浸し、山懷から闇が湧いて来た。蟬の鳴き声も衰えて行つた。さっき鮮やかな緑をきわ立たせていた台地に、鴉が意味ありげに群れていたのが、房雄の網膜に残っていた。その辺も暗くなって、台地は黒い水牛のようだった。

のように、人をとりまく風景の描写だが、みごとに小説の中の"現在"を写し取っている。「た」は単なる過去形という機能よりも、その連続のせいもあって緊張を孕み高まっていくような調子を文体にもたらしめている。単調な文末反復がリズムを感じさせもする。「竹をたてかけるぐあい」という評語は、小川が存在を世に知らしめた作家島尾敏雄のものだが、小川文体について極めて端的に言い当てたものとい

9 小川国夫（1927-2008）一静岡県藤枝市生。旧制高校入学後、カトリックの洗礼を受ける。大学入学後小説を書き始め、在学中フランスに留学、帰国後私家版「アポロンの島」を刊行し島尾敏雄に認められて作家として活躍を始める。紀行文学的な作品のほかにキリスト教や聖書に材をとった作品、故郷を舞台にした半自伝的な作品などがある。（『日本現代小説大事典』明治書院、『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店などより）

10 初出は1968年7月『風景』。作品集『流域』（河出書房新社）所収。

えよう。

時制について英語の小説についてではあるが、斎藤（2000）では

少なくとも慣例的な小説作法において、語りの基本となる時制は過去です。もちろん現在形（さらには、実験的に未来形で）語られる物語も最近少しずつ増えてきましたが、小説は、その発生の経緯からして、虚構の出来事をあたかも実際に起こったかのごとくに語る仕立てになっているため、その物語の大部分が過去形で語られているのです。（p115）

としている。また先に引用したクワーク（1988）にも時制についての言及があった。日本語文学においても過去形で語るのはデフォルトだが、さきほど鷗外「半日」でみたように実際には文末の形式はバラエティに富んでいた。そのような中での小川国夫の「～た」の連続使用はかえって特徴的であり、文体を強く感じさせる。

「ル」形の時間を超越した真理を表すという効果や「歴史的現在」というレトリック等々、文学テキストは、文法的ルールであるテンスも、主観的な転用を果たし、抒情や緊迫感等の雰囲気を自由に加減できる文体的ストラテジーの手段化してしまうのである。

5. まとめ—テキスト中の機能語の実際

だれもが"正しい日本語"を使うためにルールにのっとって使うことが必要だと信じている、受身の助動詞、アスペクト・テンスや指示のような機能語が、ガバナンスの手段として、ジャンルや社会的作用者集団における慣習として、また、文学テキストにおける構造や意図実現、文体形成に関与する存在として、さまざまにふるまう姿を見て来た。

「はじめに」で述べたように、機能語は閉じた体系あり、それゆえにテキストの種類を問わず高頻度で出現すると考えられている。日本語についての頻度順辞書"A Frequency Dictionary of Japanese"で、今回扱った機能語をみると、頻度順位5000番までのうち、「た」が4位、「ている・てる」は13位、「れる」は15位、「のである」202位、「あの」247位、「どうして」637位、等々で、たしかにかなり高頻度である語を扱ったことになる。

しかしながら、それらはルールどおりの文法的機能ばかりでテクス

トの中に存在しているかと言うと必ずしもそうではないことが確認できた。そのテキストの意図を実現すべく、パワーを持たせたり、確信の程度やニュアンスを付加させたり、文体印象を操作したり、テキスト世界をかたちづくってみせたり、ということに貢献しているように見えたのである。そしてそのことは内容語についても言えることであり、ひいては、文法書の中の語、辞書の中の語が、実際のテキストのなかではどのようにふるまうのか、といった、より大きな問題提起にもつながっていくのであろう。今後もテキストの中の語のふるまいについて、追究していきたい。

文献

安部清哉 (2009) 「第3章 意味から見た語彙史——"パーツ化"名詞優位化」 安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富棋『シリーズ日本語史2 語彙史』岩波書店 pp.73-104

クワーク、ランドルフ (1988) 『ことばの働き テキスト構造についての8講』池上嘉彦他訳 紀伊國屋書店

斎藤兆史 (2000) 『英語の作法』東京大学出版会

鈴木英夫 (1982) 「新聞の文体」『講座日本語学8 文体史Ⅱ』明治書院 pp.175-196

高崎みどり「小川国夫」表現学会監修『表現学大系各論篇16現代小説の表現3』教育出版センター pp.69-132

外山映次 (1985) 「自発・受身・可能・尊敬・使役」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 第7巻 助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』明治書院 pp.98-114

橋内 武 (1999) 『ディスコース』くろしお出版

フェアクラフ、ノーマン (2012) 『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析』日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳 くろしお出版

マッカーシー、マイケル (1995) 『語学教師のための談話分析』安藤貞雄・加藤克美訳 大修館書店

Yukio Tono, Makoto Yamazaki, Kikuo Maekawa (2013)

"A Frequency Dictionary of Japanese" Routledge

(本学特任教授)